

人類進化と文化文明の展開は続くか

「蝶の雑記帳 121」

二冊の書物を読んで啓発され、そこから何か意味のあることを思索できるのではないかと考え始めたのだが、集中できる時間が足りず、何よりも力不足のために中途半端になった。小さなことでも番号をつけて雑記帳に書きつける習慣を危うくする。けれども、頭の隅には、人類はいつまで存続できるか、人類の文化文明はどこまで展開していくのかという疑問が残る。そこで今回は、ときどき人間としての自己の存在を顧みるよすがとするために、断片ながら整理の都合上番号をつけて、その疑問を書きとめておくことにしよう。

読んだ書物は、ガイア・ヴィンス著『進化を超える進化 サピエンスに人類を超越させた 4 つの秘密』（文芸春秋）とヘンリー・ジー著『超圧縮 地球生物全史』（ダイヤモンド社）である。

前書『進化を超える進化』は、その表題が示唆し序章のタイトルが示すように、「人間がいかに生物学的人類を超える種となったかについての物語」を語ろうとする。冒頭に外科手術で「脳の延長」であるアンテナを埋めこまれた人が登場し、「初めて種を超越した人間」と呼ばれる。著者は、進化は「〈遺伝子〉と〈環境〉と〈文化〉の特別な関係に基づく」と考え、人類進化のこの三要素によって、「人間は変化する

宇宙の一生物に終わらず、自分を変える力を持つ並外れた種になった」と言う。この見方を解き明かし記述することが著者の主題である。著者は、人類の並みはずれた進化を理解するのに、四つの要因、〈火〉・〈言葉〉・〈美〉・〈時間〉が重要だと考える。副題はこの四つの要因のことを言っているのである。

けれども、人類の進化を決定づけたのがこの四つの要因であるというとらえ方には、異論が出るかもしれない。最初の三つは、たしかに、ほかの生物種の全般的な進化から並外れた種である人間へ移行発展したとき画期となった要因であり、人間の精神の特徴を〈美〉ということばで代表させるとすれば、その三つの要因が人類の〈文化〉的発展の画期となった、と行うことができるだろう。ただ、それら三つと異質な概念である〈時間〉を並列させて人間を特徴づけることに、わたしは若干の違和感を感じる。

序章の最後では、「今、わたしたちは瀬戸際に立っている」、「わたしたちは超生命体になりつつある」という現状認識が表明される。わたしは、人間がなりつつあるとされる「超生命体」ということばがどのくらい輪郭のはっきりした概念であるか今一つ理解できなかった。しかしこの認識は、今日までの人類の進化をふりかえり、自分を変える力を持つほどになった現在、将来をどのように見通して生きていくべきかという重大な問いを突きつけている。われわれは、喫緊なこの

問いと向き合い、どのような進路を選択するのがよいか日々考えなければならないのである。この問題は単に人類だけの問題ではない。人類を含めた地球上の全生物の生死にかかわり、生命全体の中でもとりわけ人類と個々の人間に突きつけられた「地球をどうするのかという厳粛な使命」の問題である。このようなことばを口に出すのは一人の凡人にはすぎた行為だけれども、そうしなければならない瀬戸際にある、と著者ガイア・ヴィンスは迫っているのだ。

第1章「宇宙が誕生し地上で進化が働きはじめ人類が登場する」から第14章「超協力的個体として生物種を超えた集合性人類へ」までは、上のような視点からの考察を述べたものである。最初に言ったように、それについて消化し理解する精力が足りず、生産的な批判をすることもできなかったの、それを書き記すことができない。けれども、第2章にある「遺伝的な進化と同様に、文化も正確にコピーされて初めて進化する」や「文化を進化させる特殊な動物が進化した」という文章が示すように、「自らの運命を決める種」となった人間が自分たちの文化文明をもっと真剣に考えることを勧告する書物なのである。この勧告を身を正して受けとめなければならない。

『進化を超える進化』が人類の文化的進化を生物学的進化の中心に据えて考察するのに対して、『超圧縮 地球生物全史』は、生物全体の歴史を地球史全体の中において記述する。

その内容を日本語の標準的単行本の大きさ四六版で 300 ページに収めるのだから、記述が趙圧縮したものになるのは当然である。なにがしかの関心をもってその分野の文献をいくつか読んできた者にはある程度聞いたことのある知識が要約されているのだが、何しろ記憶力が弱いから、結局、一定のまとまりのある全体像をあらためて識ることになった。

そうして今回は、これまでよりもずっと重くて念頭を離れることのない科学的な教示を授かった。平穩に暮らしているときわたしは、—— 地球は、美しい星々の輝く天空につつまれ、日月が規則正しく周回するように見える太陽系内の惑星としてある。地上には優美であるいは畏怖すべき山野と海洋があり、人間とともに多種多様な植物や動物が生息している—— と畏敬の念をもって眺める。

ところが、地球に残されている地質と生物の痕跡をはるか過去までさかのぼって永い年月にわたって詳細に調べて、現時点で得られている結果を見れば、日ごろ意識されていない全く異なる事実を知ることになる。太陽系のほかの天体との相互作用によって地球が受けるごくわずかな攪乱、地球の公転軌道の楕円軌道からのわずかなずれ、歳差運動による地軸のわずかな動揺など、日ごろわれわれが気にすることもない微細なゆらぎが地表の気候を変えて、生物にとって生死にかかわる環境変化をもたらす。また、太陽系に迷いこんでくる小さな天体が地球に飛びこんで衝突すれば、激烈な気候変動を引き起こす。さらに、地球の表層の内側のマグマが噴火す

る火山活動も生物には致命的な気候変動をもたらすことがある。

その影響は科学的に調べられ集積されて、その知見は今では考慮に値するほど十分に確実な大局的な生物史をわれわれに教える。それを一言で言えば、生物進化の歴史上何度か、劇的で大量な生物種の絶滅があったということ、そして、その絶滅のたびに新しく驚くべき生物進化が起きて、地球上の生物相が入れ替わった、ということである。よく話題にされて広く知られている例で言えば、おそらく地球への小天体の衝突による気候変動によって、文字どおり地表の支配者となっていた恐竜たちが死に絶えたことである。そのあとに哺乳類が台頭し、その中から人類が現われて、今では人類がほとんど地球を占有するほどになったということである。

この知見は、地質学的・生物史的時間スケールで見れば、過去に一つの地質時代を風靡した生物類とまったく同様に、人類がいずれ絶滅するという（ほとんどという副詞を必要としないくらい）確実な予言へ導く。ヘンリー・ジーは、この予言を疑うことのできない真実であるように断言する。

この予言を真剣に受けとめれば、例外なく多かれ少なかれ人間中心主義の立場から書かれてきたすべての書物の主張を無意味にする、とわたしには思われる。「宗教の重要性」、「魂は存在する」、「意識を非存在とすることはできない」、

「理念は存在する」、……などの、この現実世界を超越する主張をしてきた言説を無効にする、と思う。

「地球と生物の全史」は、わたしという人間の存在についてのこれまでの思念を根底から揺さぶるほどの宣告をつきつけるのである。しかし、この絶望的な展望にうろたえて思考を停止してはいけないだろう。生きている人間には逃れようがなく考える能力が与えられている。いや、精神を活動させることが人間の宿命である。予言は、著書『進化を超える進化』の「わたしたちは超生命体になりつつある」という現状認識の影を薄くしてしまうほどである。それでも、「自らの運命を決める種」として生きているわれわれは、全力を挙げて現在到達している相当高度な生命体としてできることを模索することから逃れることはできない。人類がいずれ絶滅するという宣告を念頭から失うことなく、自己の存在を顧みながら生きるよりほかに為すことはないのである。

2023年5月小満

海蝶 谷川修